

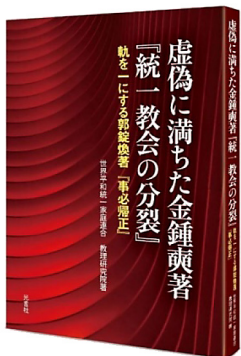
続・UCIを支持する人々の言説の誤り(19)

UCI(いわゆる「郭グループ」)およびFPA(家庭平和協会)を支持する櫻井正実氏は、二〇二一年六月三日、「第四アダムに対する理解」と題する動画を公開しました。彼はその動画で「二〇二一年は第四アダム時代の第一年目」との非原理的な、摂理観、なるものを語り、動画の終わりのほうでは、「韓子(ひのこ)女史(メグ)がその真の母の位置を離れ、お父様が聖和された」状況にあるとしたうえで、「今現在この地上で真の父母に立たれている方は顯進様と全淑様である」と断言しています。文顯進様夫妻が「今現在……真の父母に立たれている」との主張は、真のお父様のみ言や「原理」に照らし合わせると、とんでもない非原理的主張にほかなりません。前回に引き続き、櫻井正実氏の語る言説が、いかに非原理的であるのかを明らかにします。

なお、これらの問題点を総合的に理解し把握するためには、「真の父母様宣布文ウェブサイト(https://trueparents.jp/)」の掲載文や映像をごらんください。

教理研究院

注、真の父母様のみ言や「原理講論」の引用は「青い字」で、UCIおよびFPA側の主張は「茶色の字」で区別しています。



十九、真のお父様のみ言と異なる主張をする文顯進様は、第四アダムでも、真の父母でもない・その4
(13) 真のお父様のみ言…「顯進は勉強しなければなりません」
① 真のお父様の指導に従わなかった顯進様

れた行動となります。

また、私たちが「歴史的勝利者」となる道について、『原理講論』は次のように論じています。

「歴史的勝利者となるためには、預言者、義人たちに対してこられた神の心情と、彼らを召命された神の根本的な目的、そして彼らに負わされた摂理的使命……を詳細に知らなければならぬ……我々は、復帰摂理の完成者として来られる再臨主を通して、それらのことに関するすべてを知り、また彼を信じ、彼に侍り奉り、彼と一つになることによって……復帰摂理歴史の統的な蕩滅条件を横的に立て得た立場に立たなければならぬ」(288ページ)

このように「復帰摂理の完成者として来られる再臨主を通して……すべてを知り、また彼を信じ、彼に侍り奉り、彼と一つになること」によって、初めて

歴史的勝利者になることが可能であるというのです。したがって、再臨主に侍らず、従わない行動を執るならば、「歴史的勝利者」になることは絶対不可能なことと言わざるをえません。私たちは、真の父母様を無視し、み言を自分たちに都合よく解釈し、非原理的行動を執るUCI・FPA側の人々の言動に惑わされてはなりません。

② 真のお父様のみ言…「顯進は、先生と同等の立場を取っている」
櫻井正実氏は、「第四アダムに対する理解」の動画で次のように主張しています。

「再び来られた再臨主、メシヤはまず父母の世代において、アダム家庭の失敗を復帰しなければなりません。この父母の世代の失敗を復帰する中心人物が第三アダムであるお父様です。そして、子女の世代の失敗を復帰する中心人物が第四アダムである顯進様であります」

真のお父様は、二〇〇九年三月八日のいわゆる「東草事件」のとき、文顯進様を厳しく指導され、人事措置とともに郭錠煥(クワクワン)氏に「顯進は勉強しなければなりません。郭錠煥が『平和神經』を覚えてあげなさい」(マールスム選集609-131)と指示されました。それは、お父様のみ言や『原理講論』と異なる主張をする顯進様が、真摯に『平和神經』を学ぶことによって、真の父母様のみ言や「原理」を正しく理解するように願われたからです。

ところが、顯進様はその日以降、真の父母様と明確にたもとを分かつようになり、やがて反旗を翻し、真の父母様と別行動を執るようになりました。

櫻井正実氏が公開した「第四アダムに対する理解」と題する動画の内容を見ても、顯進様を中心とするUCI・FPAの人々が、いかに真の父母様のみ言や「原理」からずれた主張を

櫻井正実氏は、顯進様が「第四アダム」であるという前提に立つて全ての論を展開していますが、顯進様が「第四アダム」であるとの主張には、み言の根拠がなく、原理的でもありません。

また、「アダム家庭の失敗……父母の世代の失敗を復帰する中心人物が第三アダムであるお父様……子女の世代の失敗を復帰する中心人物が第四アダムである顯進様」であるとし、それぞれの世代で分担して蕩滅復帰するという言説を主張します。櫻井正実氏は、真のお父様と顯進様の二人で分担して、アダム家庭の失敗が初めて蕩滅復帰できるかのごとき主張をするのです。このような主張は、お父様が語られた「顯進は、先生と同等の立場を取っている」と言わしめる、ゆがんだ言説と言わざるをえません。

櫻井正実氏のこの主張は、『原

しているのが分かります。この点について、すでに教理研究院著「虚偽に満ちた金鐘甕著『統一教会の分裂』——軌を一にする郭錠煥著「事必帰正」(光言社、以下「虚偽に満ちた」)で指摘しています。このようなUCI・FPAの人々のみ言に対する姿勢は、真の父母様を軽視ないし無視しており、大問題です。

『原理講論』は、本然の理想世界とはいかなる世界かについて、次のように述べています。

「天国においては、神の命令が人類の真の父母を通して、すべての子女たちに伝達されることにより、みな一つの目的に向かって動じ静ずるようになる」(69ページ)

神の命令は、「人類の真の父母を通して」全ての子女たちに伝達されるということです。したがって、真の父母様の命令に従わないことは、神の願いからず

理講論』が述べる「ユダヤ民族……彼らが立てた『メシヤのための民族的基台』の上に、来られたメシヤを中心として、復帰摂理が完成される」(282ページ)、また「復帰摂理の完成者として来られる再臨主」(288ページ)という「原理」の内容と一致していません。

『原理講論』が論じている復帰摂理の「概要」は、以下のようになります。人間始祖の墮落によって「信仰基台」と「実体基台」を失ってしまいましたが、その「信仰基台」と「実体基台」をアダム家庭で蕩滅復帰し、「メシヤのための基台」を立てる摂理が行われました。しかし、カインがアベルを殺害することで、その摂理は失敗に終わりました。

その「信仰基台」と「実体基台」による「メシヤのための基台」を蕩滅復帰する家庭的な摂理は、ノアの家庭さらにアブラハムの家庭へと延長され、やが



てヤコブの勝利によって家庭的な「メシヤのための基台」は勝利しました。しかし、サタン側はすでに民族レベルの基盤を造成していたため、神の側もそれに対抗するために、ヤコブの子孫がエジプト苦役を経ながら、民族レベルの神側の基盤を拡大していくようになります。

そして、モーセを中心とする民族レベルでの「信仰基台」と「実体基台」による「メシヤのための基台」を立てながら、サウル・ダビデ・ソロモンの統一王国時代を経て、やがてイエス様の時に至って「メシヤのための基台」の上で、メシヤを迎え、「**世界的カナン復帰路程**」(『原理講論』404ページ)を歩んでいくようになるのです。ゆえに、これらの復帰摂理の結論的な部分の論述は次のようになっていきます。

「**イエスは初臨のときに「メシヤのための家庭的な基台」の中心人物であったヤコブの立場**

を蕩滅復帰させるために、三人の弟子を中心として十二弟子を立てられることによって、家庭的な基台を立てられたのであり、また、七十人の門徒を立てられることによって、その基台を氏族的な基台にまで広めようとしたように、彼は、再臨される場合においても、その「メシヤのための基台」を、実体的に家庭的なものから出発して、順次、民族的、国家的、世界的、宇宙的なものとして復帰され、その基台の上に、天国を成就するところまで行かなければならないのである」(『原理講論』432ページ)

櫻井正実氏が述べる言説は、『原理講論』が述べる摂理観と異なるものです。長きにわたる復帰摂理歴史を通して、アダム

的、民族的、国家的に蕩滅復帰していきながら、そうして立てた歴史的な「メシヤのための基台」の上で、メシヤの降臨を迎えているにもかかわらず、櫻井正実氏の言説は、まるで「メシヤのための基台」を家庭的にさえ立てないままメシヤを迎え、真のお父様と顯進様の二人によって初めて、アダム家庭の失敗が蕩滅復帰されるかのごとく述べています。これは、虚偽の言説」と言わざるをえません。

家庭連合)を分ける最も根本的な境界線です。顯進様にとって摂理の中心は神様であって、真の父母ではありません。……現在、教会は食口たちの信仰を、神様中心から真の父母中心に変えてしまいました」(A6面)

(14) 摂理の中心は、真の父母様である

この主張は、真のお父様のみ言から完全にずれています。この言説の誤りについて、すでに「虚偽に満ちた」で取り上げていますので、以下、同書籍から抜粋します。

二〇一七年十二月二日、顯進様はFPAを独自の創立しました。彼らが配付した「**文顯進会長、彼は誰なのか?**」という新聞は、顯進様の考え方を次のように紹介しています。

「顯進様の主張するアイデンティティは、ことごとく真のお父様のみ言や思想と食い違っています。金鍾奭氏は、統一教会の伝統」に関する顯進様のアイデンティティを次のように述べます。……

「**1) 神様中心か、真の父母の中心か? 第一の質問は「摂理の中心は誰か」につながる質問であり、顯進様とこの教会**」(『

「**第一に彼**(注、文顯進様)は、**復帰摂理の中心が創始者**(注、真のお父様)ではなく、**創造主である神様であることを主張する**」(63ページ)

また、郭錠煥著『事必帰正』も次のように述べます。

「**摂理の中心は誰か**」という質問では、**顯進様は神様が中心であることを明らかにされました。……祝福家庭が摂理の中心が真の父母様であると間違っ**

したならば、刑務所に行くのは……罪を犯した本人なのです。それと同じく、墮落は人間がなしたために、人間を中心として再創造過程を経て、墮落しなかつた、それ以上の時を越えてのみ人類の解放と平和の世界が訪れることを、誰よりもよく知っておられるのが神様なのです」(『祝福』一九九二年夏季号16ページ)

の中心は神様ではありません」とあります。すなわち、人間始祖アダムとエバの墮落で失った『真の父母』を取り戻すために、『真の父母』ご自身が責任を果たし、勝利しなければならぬという観点から見ると、復帰摂理の中心は『真の父母』であると言えるのです。

引用終わり)

このように顯進様の説く言説は、真のお父様のみ言や『原理講論』と大きく異なっています。これこそが、お父様が「**顯進は勉強しなければなりません**」と言われたゆえんと言えるでしょう。顯進様のこの考え方は、「**文顯進会長、彼は誰なのか?**」を

『原理講論』およびお父様のみ言を、以下引用します。
「もしユダヤ民族が、イエスを信じかつ侍り奉って……いたならば、そのときにおいても彼らが立てた「メシヤのための民族的基台」の上に来られたメシヤを中心として、復帰摂理は完成されることになっていたのである」(『原理講論』282ページ)……

……金鍾奭氏や郭錠煥氏が述べる顯進様のアイデンティティとお父様のみ言の間には、明確な、食い違いがあることが分かれます。……注目すべき点は、金鍾奭氏が「**復帰摂理の中心が創始者ではない**」(イ)と否定しており、さらには、郭錠煥氏も「**祝福家庭が摂理の中心が真の父母様であると間違っ**

事実、『原理講論』は、「人間始祖がその責任分担を全うすることができなかつたために、逆にサタンの主管を受けなければならぬ立場に陥ってしまった。それゆえに、人間がサタンの主管を脱して、逆にサタンを主管し得る立場に復帰するためには、人間の責任分担としてそれに必要な蕩滅条件を、あくまでも人間自身が立てなければならぬのである」(276~277ページ)と論述しています。それゆえ、人間始祖の立場で来られた『真の父母』の使命が極めて重要である、ということは言うまでもありません」(30~32ページ)。

「**真のお父様は、単なる「神様の息子」ではない**

「**救いの摂理の中心は神様でありません。創造の時は神様が中心でしたが、墮落は人間がなしたために、人間に責任が伴うようになるのです。罪を犯**

前述したように、『原理講論』は、「**メシヤを中心として、復帰摂理は完成される**」としており、み言にも……「**救いの摂理**

「**真のお父様は、単なる「神様の息子」ではない**

FPAが配付した「**文顯進会**

長、彼は誰なのか？」を読むと、
顯進様の考え方を次のように紹介
しています。

「顯進様が理解する真のお父
様は、神様の息子であり第3ア
ダムとして来られた人間であつ
て、神様ご自身ではありません。
真のお父様は神様とイエス様を
同一視した信仰の誤謬を正し、
神様中心の信仰の伝統を立てて
来られた方でした。……真の父
母を神様と同一視して、過去の
信仰人たちが犯したのと全く同
じ過ちを犯しています」(A6
面)

ここで彼らは「神様とイエス
様を同一視した信仰の誤謬」と
述べていますが、『原理講論』
の論述を正しく理解する必要が
あります。『原理講論』は「多
くの信仰者たちは、イエスを創
造主、神であると信じてきた。
……しかし、彼(イエス)はあ
くまでも神御自身となることは
できない」(258ページ)と

あります。しかしながら、それ
と同時に「原理は、これまで多
くの信徒たちが信じてきたよう
に、イエスを神であると信じる
信仰に対しては異議がない」(2
56〜257ページ)と述べて
おり、さらには「イエスは……
神と一体であられるので、彼の
神性から見て彼を神ともいえる」
(258ページ)「彼(イエス)
を見たのは、すなわち、神を
見たことになるのも事実」(同)
とも述べていることに留意する
必要があります。すなわち「神
様とイエス様を同一視した信仰
の誤謬」と、一方的に切り捨て
ることも行き過ぎであると言わ
ざるをえません。

この「キリスト論」の観点か
ら見るとき、真のお父様は、顯
進様が述べるような、単なる
「神様の息子」であり、「第3ア
ダムとして来られた人間」と言
い切るのは「原理」と異なる言
説であると言わざるをえません。
この点についても、すでに『虚

偽に満ちた』で論じていますの
で、以下、同書籍から引用しま
す。

「(金鍾奭著)『統一教会の分
裂』は、『第二に文顯進は……
宗教的救援論の限界の中に創始
者(注、お父様)を閉じ込めて
しまふ統一教会の宗派的教理と
アイデンティティを批判した。
統一教会が創始者を創造主・神
様と一体を成した存在、神様の
実体として崇拜してきたのと違
い、文顯進は創始者を創造主・
神様の理想を実現する為に一生
を捧げた「息子」として認識し、
創始者をこうした次元のメシヤ
として定義している」(63ペー
ジ)……

また郭錠煥著『事必帰正』は、
「私たちはメシヤも「人」であ
るといふ原理を学びながら、い
ざ実生活では、しばしばメシヤ
を神格化し、またこの誤った信
仰をそれとなく誇示する間違い
を犯したりします」(65ページ)

と述べています。

これらの言説を真のお父様の
み言と比較し検証してみます。
「神様がアダムとエバを造つ
た目的は、どこにあるのでしょ
うか。……神様がいらっしやる
にしても、神様が人間の父母と
して現れるためには体をまとも
なければならぬのですが、その
体をもった代表が誰かとい
うと、アダムとエバなのです。
……それゆえアダムとエバは、
人類の始祖であると同時に、天
地を主宰する神様となるのです。
実体をもった神様、すなわち永
遠の無形世界の神様の形状を代
わりにもって現れた立場で、父
母の立場で世界を統治する責任
がアダムとエバにあつたのです」
(八大教材・教本『天聖經』1
24ページ)

「アダムとエバが、心の中に
神様をお迎えし、一体となって
完成した上で、結婚して子女を
生んで家庭を築いたならば……
神様は、真の愛を中心としてア

ダムとエバに臨在されることに
より、人類の真の父母、実体の
父母としておられ、アダムとエ
バが地上の生涯を終えて霊界に
行けば、そこでもアダムとエバ
の形状で、彼らの体を使って
(神様は)真の父母の姿で顯現
されるようになるのです」(『平
和神經』54〜55ページ)

以上のみ言から見ると、ア
ダムとエバが完成し、真の父母
となったなら、神様はアダムと
エバに臨在され、真の父母は
「実体の神様」の立場になると
いうのです。……

『統一教会の分裂』や『事必
帰正』を検証すると、UCIを
支持する人々は統一教会の「ア
イデンティティ」を間違つて理
解している事実が明白になりま
す。そして、これらの「統一教
会のアイデンティティ」が、顯
進様の理解する「統一教会のア
イデンティティ」に基づいて構
成されていることからすれば、
顯進様が理解する「統一教会の

アイデンティティ」は間違つた
主張であるという事実が明らか
になります。

また、メシヤについても、「創
始者を創造主・神様の理想を実
現する為に一生を捧げた「息
子」である」と定義します。し
かし、『原理講論』やみ言は次
のようになっています。

「元来、神がアダムとエバを
創造された目的は、彼らを人類
の真の父母に立て、合性一体化
させて、神を中心とした四位基
台(注、自同的四位基台)をつ
くり、三位一体をなさしめると
ころにあつた。もし、彼らが墮
落しないで完成し、神を中心と
して、真の父母としての三位一
体をつくり、善の子女を生み殖
やしたならば……神の三大祝福
完成による地上天国は、そのと
き、既に完成された」(267
ページ)……

「この世の中に一つの真のオ
リーブの木を標本を送ろうとい
うのが、メシヤ思想です。とこ

ろで、真のオリーブであるメシ
ヤ一人が来てはいけません。サ
タン世界が夫婦を中心として社
会を形成し、国家を形成したの
で、メシヤが一人で来ては、真
のオリーブの木になりません。
メシヤとしての真のオリーブの
木と、メシヤの相対となる真の
オリーブの木を中心として、こ
れが一つになってこそ、真のオ
リーブの木として実を結ぶこと
ができます」(天「一國經典」『天
聖經』183〜184ページ)

上記のみ言を要約すると、メ
シヤは「神の創造目的」を完成
するために来られるのであり、
その三大祝福を完成するには、
真のお父様お一人では成しえな
いのです。すなわち、再臨主は
「小羊の婚宴」を成して『真の
父母』にならずして、創造目的
を成就できません。

金鍾奭氏は、「文顯進は創始
者を創造主・神様の理想を実現
する為に一生を捧げた「息子」
として認識し、創始者をこうし

た次元のメシヤとして定義して
いる」と主張し、また郭錠煥著
『事必帰正』も「私たちはメシ
ヤも「人」である」といふ原理を
学びながら……」と述べますが、
それらの主張は、神のみ旨を成
就される「真の父母」(「天地
を主宰する神様」という観点か
ら見れば、根本的に誤つた言説
であると言わざるをえません。

前述したみ言に、「神様と真
の父母に待らなければなりません。
神様は縦的な父母であり、
完成したアダムとエバは横的な
父母であつて、この二つの父母
が一つになったその上で統一が
成され、天国と神様が連結され
るのです。ですから、神様と真
の父母に待らなくては何もでき
ません」(八大教材・教本『天
聖經』2316ページ)とある
ように、理想世界を実現するに
は、神様だけを中心とするので
は天国(天一國)は連結されず、
どこまでも「二つの父母」(天の
父母と真の父母)が一つになつ

たその上で統一が成され、天国と神様が連結される」ということを知らなければなりません。したがって、真のお母様も真のお父様と共に『真の父母』として神様の創造理想を実現するために一生をささげてこられ、今なお歩んでおられるのです」(33～38ページ。引用終わり)

以上のように見たとき、顯進様の説く言説は、真のお父様のみ言や「原理」から大きくかけ離れていることが明確になるばかりです。顯進様がいま一度、お父様の「**顯進は勉強しなければなりません**」とのみ言と願いに、虚心坦懐^{たんかい}になって従い、み言と「原理」を学び直して新しく生まれ変わり、真の父母様のみ言と信仰の伝統を相続していかれるよう切に願ってやみません。

【教理研究院からのお知らせ】

「非原理集団・駒場久美子グループの言説の誤り」の映像視聴について

非原理集団・駒場久美子グループが教会員を狙って勢力拡大を画策しています。その中心人物は、三万双の韓日家庭である駒場久美子氏と李勝哲^{イスンチョル}氏です。彼らは2014年1月15日に除名されています。

駒場久美子グループは、「実体み言研究会」や「一般社団法人 真成」などの名称を使って活動しています。駒場久美子氏は一時期、非原理集団である中山芳子グループに所属しており、彼女の主張する言説は、中山芳子グループの誤った言説の影響を強く受けています。また、夫の李勝哲氏が、清平の韓国事務局のスタッフをしていたこともあり、彼女はそのツテで天正宮博物館の訓読会に参加していました。訓読会に参加しながら、彼女は特別に悟ったことがあると主張するようになり、その後、中山芳子グループを離脱。独自に悟ったという非原理的な言説を講義し、それを書籍化して勧誘活動をしてきました。

駒場久美子グループで活動していた核心メンバーが、彼らの活動の誤りに気づき、集団で脱会し、駒場久美子グループが外部に流出することを極端に避けてきた彼らの言説について、その詳細な資料と内容を伝えてくれました。

教理研究院がその内容を研究して、駒場久美子グループの言説の根本的誤りを整理しました。特に、駒場久美子グループの説く「原罪観^{しよくざい}」「贖罪観^{じやくざい}」「聖霊観^{せいれい}」は、ことごとく真の父母様のみ言や『原理講論』と食い違った言説であるため、その問題点を分かりやすく、映像にまとめました。

各教区・教会の牧会者におかれましては非原理集団・駒場久美子グループの勧誘活動によって、所属教会員に犠牲者を出さないため、この映像を活用、視聴し、現場の教育に役立ててくださるようお願い申し上げます。



【映像の内容】
前編・駒場久美子グループの言説の誤り (約 30分)
後編・駒場久美子グループの言説の誤り (約 27分)

上記の映像を「真の父母様宣布文サイト」にアップしています。
(https://trueparents.jp/?page_id=6988)